

国際交流及び日本文化学習のための京都研修

—「幕末～明治維新」を留学生と共に学ぶ—

福岡 昌子・日本語学習サポートサークル「てらこや」

International Exchange and Kyoto Study Trip, “The Late Tokugawa Period-Meiji Restoration”

FUKUOKA Masako, The Japanese learning support circle ‘Terako-Ya’

〈Abstract〉

A field trip to Kyoto for international exchange, for non Japanese university students, Japanese students & citizens, to learn more about the era of “the end of the Edo period and the Meiji restoration” was adopted and carried out. The seminar was given by Mr. KIMURA Yukihiko, the head of the curators at Kyoto City Reizan Museum. Following that, the group visited and studied several sites in Kyoto that survive from this period.

The participants learned about the way of life and thinking of the reformers, for example SAKAMOTO Ryoma, who played a significant role during the period of the Meiji Restoration, which is the foundation of modern Japan. There was not only an effective international exchange among foreign students, Japanese students and citizens, but the programme also provided an opportunity for them to learn about each other’s culture and history better through meaningful interaction.

キーワード：日本語学習支援、日本人学生サークル、留学生、京都研修、坂本龍馬

1. はじめに

日本語学習サポートサークル「てらこや」は、留学生への支援サークルとして様々な活動をしてきた。これまで2度学生が主体となり「三重大学国際交流事業経費助成申請」を行い、伊勢や伊賀において地域在住外国人の支援を行う方々との交流を図ったり、ペルー・韓国の民族演奏会を本学において開催したりした。

2010年度は、サークルで企画した「国際交流及び日本文化学習のための京都研修—幕末～明治維新を留学生と共に学ぶ—」事業が、国際交流基金事業に採択され、1泊2日の京都研修を実施した。本事業では、京都市霊山歴史館の学芸課長の木村幸比古氏を招きセミナーを実施し、幕末～明治維新に関わる京都での研修や異文化体験も含め、留学生と日本人学生との交流を図った。

2. 事業概要

日本人学生のボランティアが中心となっているこの日本語学習サポートサークルは、三重大学の留学生に日本語を支援する活動を行なっている。サポートの内容は留学生のニーズにより、会話、日本語能力試験の問題集、レポート・論文のアドバイス、申請書の添削など様々である。中には日頃の疑問点や悩みなどを相談する事例もある。学生間の情報交換を兼ね、週1回のミーティングを行うほか、親睦・交流のため年数回の交流パーティー、夕食会、その他イベントやサポートのレベルアップのための勉強会を行なっている。留学生から英語や韓国語、中国語など教えてもらう機会も得ている。近年は、本サークルのメンバーが、留学生とともに近隣小学校を訪ね外国籍児童の学習支援を行ったり、ブラジル人学校の外国籍児童に対して、漢字や算数などの日本語や教科支援を行ったりしている。

このような活動を行う中で、日本人学生たちの間で、留学生に日本語をサポートし、日本文化を多く知ってもらうためには、自国の文化をもっと学習する必要があるのではないかと、さらに、2004年に実施した研修旅行のように共に学びあう機会を作って異文化交流が図れないか、という意見が出始めていた。そんな矢先に、国際交流基金事業の募集があったため、協議した結果、留学生にとって関心のある京都を舞台にした歴史を学ぼうということで、今回は「幕末～明治維新」の時代に焦点をあてて応募することになった。

「幕末～明治維新」の時代に近代日本の礎が築かれたことを考えると、現在の日本を理解する上でこの時代は非常に興味深く、京都は留学生にとって日本文化を強く意識する地域でもあった。また、NHKの大河ドラマでも紹介されていたこともあり、特に幕末～明治維新という時代において活躍した「坂本龍馬」にスポットを当てることにした。激動の明治維新において、中心的役割を果たした坂本龍馬の生き方、考え方を学ぶことで、近代日本の根底に流れる歴史観、文化、思想について留学生と共に学ぼうとした。

研修の目玉として、京都市霊山歴史館の学芸課長、木村幸比古先生をお招きし、『坂本龍馬の生き方から学ぶ現代の若者へのメッセージとは？～エピソードや 史実から～』というタイトルで講演会を企画した。本事業では、留学生と日本人学生が交流を深めるだけでなく、坂本龍馬はじめ志士たちの生き方・考え方を通して、近代日本の根底に流れる歴史観、文化、思想について、相互に歴史や文化理解を深めることも目的とした。

3. 企画から実施まで

企画から実施まで、「てらこや」サークル部長、副部長、サークルメンバー、顧問教員が協議し、下記のように実施していった。

- ・企画ミーティング：2010年4月～7月、応募申請書を作成した。

- ・応募申請選考会：2010年5月26日、サークル部長による企画案の説明を行った。
- ・勉強会：2010年7月23日、30日、8月9日 勉強会並びに研修資料を作成した。
- ・募集期間：2010年7月～8月6日
- ・研修実施日程：2010年8月10日～8月11日

第1日目：津～京都、①幕末～明治維新ゆかりの地探索：伏見、太秦映画村、勉強会

第2日目：霊山歴史館の学芸課長、木村幸比古先生のセミナー、幕末維新ミュージアム

「霊山歴史館」、②幕末～明治維新ゆかりの地探索：河原町、京都～津

参加者：三重大学学生8名、留学生3名、市民7名、教員1名

なお、事業国際交流の発展のため市民の希望参加者も募り実施された。

表1. 「国際交流及び日本文化学習のための京都研修」の実施日程

	2010年8月10日	2010年8月11日
午前	三重大学正門集合 (移動は2日間貸切バス) ①幕末～明治維新ゆかりの地 探索：伏見「寺田屋」他 伏見龍馬街道	宿泊地出発 霊山護国神社 霊山歴史館 「木村幸比古先生の講演」
午後	太秦映画村 (壬生寺) 宿泊地：大原	円山公園 ②幕末～明治維新ゆかりの地 探索：河原町他 三重大学到着解散
夕食後	勉強会	

4. 講演

幕末史研究で著名な京都市霊山歴史館学芸課長の木村幸比古氏に講演を依頼した結果、幸いにも京都市霊山歴史館にて貴重なお話を拝聴することができた。市民も参加したことで、非常に親しみのあるご講演をいただいた。下記にご了解を得て講演内容を紹介する。

4. 1 『坂本龍馬の生き方から学ぶ現代の若者へのメッセージとは？～エピソードや史実から～』(京都市霊山歴史館の学芸課長、木村幸比古氏)

きょうは、みなさんに龍馬の話をしていただきたいと思います。レジュメには、「～龍馬の魅力～」ということで「龍馬からのメッセージ」というのが出ています。子どものときから天才だという人は稀です。私がいちばん最初に霊山歴史館に入ったときの会長さんは松下幸之助さん、理事長さんは塚本幸一さん。塚本さんはワコールの社長さんでした。いまの理事長はJALの会長の稲盛和夫さんです。財界の人ばかりにこの歴史館を支えていただいています。龍馬は非常に経済的なものに明るいということもあります。

いま「龍馬伝」というNHK大河ドラマが放映されています。岩崎弥太郎から見た龍馬ですね。NHK大河ドラマでは49作目です。来年の「江～姫たちの戦国～」で50作です。これですべて全国各地の登場人物というか関係するところは終わります。NHKの大河ドラマはどういうことを描くかという、いま国民の中でないものを先人の生き方に耳を傾けてそこから学びましょうというのが大河ドラマなんです。ですから現代劇はないです。必ず歴史を遡らないとダメだということがあります(笑)。いままでは小説を元にドラマを作っていましたが、小説というのは書かれた状況や時期などいろいろなものに影響を受けています。司馬遼太郎先生の『龍馬がゆく』というのは非常に名作なのですが、40年前のものです。昭和のものです。ところが、いまはもう平成も22年。みなさんはもう平成のお子さんなのです。ですから平成のものを作りたい。大友監督さんは47歳。ハリウッドで助監督をなさってアメリカで育ってきた人ですし、ここへ来られましたが福山雅治さんも42歳。いま演じている人がみんな平成の時代をしっかりと受け止めている人ですから、平成のドラマを作りたい。で、リハーサルはないです。すぐに本番なんです。カメラが5台ほどあって、パーッとしゃべっていく。後ろからも前からいっぺんに撮るとい撮り方です。ですから短期間で短時間です。11月に終わりますけれども、10月の中頃くらいまで撮ります。ですから1作くらいしか、溜め撮りがないわけです。そういう中でやっています。

大河ドラマは2,000万人の人がみているんです。それがいまちょっと減ってきています。これは盛り上げていかないといけない。国民にみてもらわなければいけない。そういう中で展覧会をやったりトークショーをやったり講演会をやったりします。委員(2010年NHK大河ドラマ「龍馬伝」展示委員)が声をからしてでもワーッとやることによって盛り上げて、ドラマを1人でも多くの人にみってもらうということです。私も委員の1人です。私の下で働いている研究者(学芸員)は35歳くらいの人たちです(笑)。もう、みんな私の子どものような年齢の人たちなんです。そういう人たちがみんな、勝海舟の研究、龍馬の研究、長崎の研究という、自分が研究しているものを持ってきて話す。それを精査して私がプロデュースして映像を作ったり地域で講演会をしたり展覧会をしたり、役者さんとトークショーをやったりグッズを作ったりします。先週も、香川照之さんという三菱の創業者を演じられた人と一緒にトークショーをやりました。もういろいろなことをしないと昔のように盛り上がりません。

これからみなさんに、このレジュメに要約したことについてお話します。まず、幼少期です。龍馬はどのような子どもでしたかということ、龍馬は二男三女のいちばん末っ子でした。お父さんが39歳、お母さんが38歳のときの天保6年11月15日に生まれました。未

年生まれです。

龍馬の母は、龍馬が12歳のとき結核で亡くなりました。天保というのはどういう時期かというと、大嵐が来て雨が降って干ばつということで作物ができない。もう20万人とも30万人ともいうくらいの人天保の時代には死んでいる。そういう中で龍馬は生まれている。だから、もう可愛いんです。子どもを育てようということにみんなが必死になった。お母さんが亡くなって、乙女姉さんという人が母親代わりに龍馬を育てた。乙女姉さんというのは身長が175センチ、体重が113キログラム。馬に乗るのが上手かった。そんな人が馬に乗ったら馬は倒れてしまうんじゃないかと思うけど、小説とかマンガではみんなそう書いてある。そして学問ができて剣術ができてオールマイティのパーフェクト的な女性なんだけれども、弟は何もできない。お兄さんの権平さんは龍馬と21歳違う。で、龍馬は泣き虫で涙垂れで気が弱くて12歳のときまで寝小便をしていた。泳げなかった(笑)。乙女姉さんは弟がドロップアウトしているのを見て、これではいかんというので剣術で鍛える。もう叩いて叩いて鍛える。それはもう叱咤激励……、激励ではない。褒めるのではないです。乙女姉さんはもう叩いて叩いて叩きまくった。いまでいうと、いじめですね(笑)。泳ぎの練習では、乙女姉さんは体力があるので龍馬に腰ひもを付けて、川の上からパーンと投げて龍馬を釣り上げるのです。このようにして泳ぎを仕込みました。

身分が高い人(上士)の子どもと低い人(下士)の子どもがいる。龍馬は身分の低い人の子どもです。身分の高い人の子どもとケンカをした。そうしたらお父さんは自分の職がなくなる可能性もあるから、自分の子どもの龍馬は悪くないんだけど、そこで塾をやめさせてしまう。そうすると龍馬は、僕は悪いこともしていないのに何で退塾させられるのだということ、完全にドロップアウトしてしまった。乙女姉さんは、剣術というものをもって龍馬を鍛えようと考えた。なぜ剣術はいいかというと、上士の子どもであろうと下士の子どもであろうとバンバン殴って勝ったほうが勝ち。こういう中で龍馬は、自分が剣術の竹刀をもって相手を罰するという気持ちができていきました。

人間には「間(ま)」というのがあります。これは大事なのです。みなさんと私とはこうして話していますね。これはライブなんです。インターネットでしゃべって聞いているのだったら、空気もないし暖かさもないし私の囁きも聞こえない。ところが人間というのには人と人の「間」があって、そして空気ですべて繋がっている。だから電話で声を聞いたのより、ナマで聞いたほうが親密になります。

その次に、人間には時間という「間」があるのです。きみが日本人の美しい女性と昼にデートした。そして別れたあとすぐに「きょうは楽しかった」とメールを打つよりも、夜の10時ころにメールしたほうがいい。きょうはとても楽しかった、最高だった、と打つ

と、夜の10時。こんな時間に自分のことを思ってくれる、いい男性じゃないか、と彼女は思う。ところが5分も経たない間に、楽しかった、楽しかった、と。何だ、これ、と。時間というこの「間」が、人間というのを考えさせるのです。スポーツでもそうですよ。テニスでも何でも、すぐにパッとやったらダメなんです。自分はきょうは何を上手くやろう、という意識を先に持たないといけないのです。その意識を持ってから次にものごとを行う。そうするとパーフェクト的な感じが出てくる。オリンピック選手でも、この1キロをどうして泳いだら記録ができるか、というのを考えてシミュレーションする。そうしてやると記録が出る。それが、時間ということです。1日1時間の稽古を1日10時間まとめてやったから、次の10日間は稽古をするのをやめた。それは違う。

その次に大事なものは、空間です。霊山歴史館にパッと入ったら、ここの空気が変わるのです。なぜかというと、霊山歴史館にきょうはどんなものが並んでいるか、という意識があって入っていくから、わあー、きれいだ、素晴らしい、ということになる。会社でもそうですよ。いくら余計にモノが売れても段ボールがワーッと積んであれば、この会社はすごいことはないなと思う。ところが小さい会社でパッと開けてスッと入った瞬間にフロントの女性に、いらっしゃいませ、とやられると、この会社はすごいと思う。

モノと人間、時間、空間といういろいろなものの中で、人間というのは生きている、生かされている。これが大事なんです。日本人は庭を覗いてモノを食べています。京都の中の企業はすごいじゃないですか。任天堂さんはゲームで最高。京セラさんはソーラー。で、ワコールは下着。京都のいたるところに世界の企業があります。これらの企業は、東京や大阪へ本社をもっていかないです。それらのオーナーと一緒に会食すると何を言うかという、大阪とか東京とか言わない。世界の話をしている。なぜかという、経済には国境がないんですよ。

学問には「耳目の学」というのがあります。龍馬は、目で見て耳で聞いて、そして自分で思考する。これがないとうまくいかない。きみらの中には天才と言われる人間がいる。たとえば石川遼選手は天才と言われる。ところが、天才というものはないんです。努力なんです。石川遼選手のお父さんがゴルフをやっていて、どうしても世界に行ってタイガー・ウッズのような人間に育てたい、という意識があるんですよ。で、お父さんも体を鍛えた。そして子どもはそのお父さんの背中を見ながら、いつしかお父さんの夢を追った。だから天才が生まれたんです。それは二代です。親も努力して子どもも努力して天才が生まれた。イチローだってそうでしょう。イチローのお父さんだって野球をやっていた。イチローは次男だけど、一朗という名前をつけた。世界で一番になってほしいという意識があったのです。イチローのお祖父さんも、体力を作り、一生懸命仕事をしてきました。

日本人は、練習じゃなしに稽古ということをします。「稽古」には、昔を考える、という意味があるのです。ですからお茶を習うのに宗家に習わなくてもふつうの先生で一生懸命にやっている人に習っても千利休に通じるのです。ずーっと行ったらやはりそこに戻るので。これが日本人の稽古です。外国のレッスンで1、2、1、2とやっている練習は繰り返す。そういうのとちょっと違います。

龍馬は、剣術は小栗流を学び実力をつけました。で、江戸に行った。そこでは北辰一刀流です。違う流派です。このときに龍馬は、先ほど言った、人間、時間、空間ということをきちんとシミュレーションをしていて、アメリカのペリーの黒船が来たのを見てカルチャーショックを受けたのです。何もしないでパッと見ると、大きい船だなあ、すごいなあと思うんだけど、違うのです。自分の中で剣術をやっているから、見方が違うのです。とらえ方が違うのです。現場に行っていて見ているから違うのです。だから、現場に行くというのは力があるんですよ。

ペリーの30代の手紙があります。メキシコ戦争に行ったときの上官に自分の友達を紹介している手紙です。彼は真面目で賄賂を贈ったりしていない。真面目に一生懸命やっているから彼を入れてやってくれという頼みごとの手紙です。きちんと書いてあります。ペリーは日本に来るときにシーボルトの本をすべて読んでいます。日本の地図にも、当時自分で3万ドル出しています。そして蒸気船を造る技術者だったのです。で、自分の造った船に乗って来ました。

龍馬の船での移動距離は2万キロに達しています。歴史館に入ると、船があります。2万キロです。私は2万キロ船で行ったら、おそらく寝てしまう。で、着いたところで目が覚める。龍馬は違うのです。船の中で、行動する前にいろいろなことを考えているのです。そして会った人間にアクションを起こす。アクションを起こして、新たにもう1つデータを得るわけです。これを何回も何回もやりながら知識や情報を自分のものにしていきました。

私はここ（霊山歴史館）に来て、1つ怒られました。私は1年間に2,000人に会います。人数がなぜわかるかという、名刺の数です（笑）。学生には、がんばれよとハイタッチする。それしかできません。なぜ怒られたか。先生と、きょう、挨拶したでしょう。ところがここを出たときは、きょうは忙しいからと、パッと、きょうはこれで勘弁してください、となるじゃないですか。それでは人に覚えてもらえない。「出迎え3歩、見送り7歩」という言葉があります。これをやったら絶対きみたちは就職活動をしたときに好感を持たれます。そして、頭をパッと下げたらいけない。ゆっくりと下げる。このようなお辞儀をだれがやっているか。コンパニオンさんがやっているじゃないですか。ワコールのキャリ

アサービスでやっています。私は博物館のボランティアをするときにスミソニアンの研究員を見ました。県立の博物館の学芸員を見ました。そういう人がボランティアに会ったとき挨拶ができない。モジモジしている。これでは相手にぜんぜん伝わりません。

龍馬というのは、先ほども言ったように、ものごとを的確に掴む。黒船にカルチャーショックを受けたわけですよ。で、何をしたかということ、この中にいたのでは自分は出世できない。大事なものは、志(こころざし)なのです。志がないことには何をやってもだめ。日本の侍は強いと言われています。強い、と違うのです。生きたいという気持ち、志が強いのですよ。そういう教育をされてきている。

はっきり言って、いま大学でいちばん困っているのは、ゆとり教育です。体格はいいのだけれど体力がないです。30分授業していると、横になっている(笑)。おそらくコンビニで朝まで仕事をやって大変なのはわかる。それともう1つは語学力がないです。中国人が1,000円のアルバイト料です。日本人は850円です。なぜかということ、京都でも中国語をしゃべれる学生がいない。だから、ホテル行ったら全部中国人です。パナソニックは中国で従業員が30万人いるんですよ。留学している学生は日本のパナソニックに受かりたい。なぜかということ、日本で採用になって中国に帰ったら3階級特進になる(笑)。中国人の総領事は、まずここに挨拶に来ます。なぜか。中国人は賢い。日本の企業を率先して見ておかないといけなから。それでこの次に会ったときに、創業者の松下幸之助さんのミュージーアムを見てきました、と言うと、行ってくれたか、と。中国でそれを聞かれたら、オーッ、謝、謝となるでしょう(笑)。

医療でもそうなんです。地域医療はいま日本でだめなのです。お医者さんがみんな地方に行かない。うちの家内のおやじは偉かった。私にこういうことを言いました。地域医療をやろうと思ったら、病気だけを治していたらだめなんです。患者の「患」という字を見ると、心に刺さった串を抜いてあげるようなことをしないと地域医療は務まらない。うちの孫が熱を出した。電話がかかってきて、どうしよう、と。大丈夫大丈夫だ、薬を飲んで暖かくして寝たら治るよ、とおばあさんに言うと、おばあさんが安心する。それで、治った。よかった。1つの言葉でちょっとのことで、人間というのは安らぐんです。

龍馬は脱藩して薩摩に行きました。それまでは長州です。薩摩へ行くと、船を造っているところがある。ガラスを作っているところがある。そういう技術がある。堺には鉄砲鍛冶の技術がある。あるとき、その技術をもってだるま型自転車を作った。見たことがあるでしょう。前の車輪が大きくて後ろの車輪が小さい、ピエロが乗っているような自転車です。あれを見て、試作品を作った。ミヤタの自転車があるけど、ミヤタというのはもともと有名な鉄砲鍛冶です。堺の鉄砲鍛冶が一瞬にして自転車を作った。それで富を成した。

これは、志なのです。何かモノを作って世の中のために貢献したい。国のために心血を注ぐのを厭わず、同士のために涙を流すのを厭わず、家族のために汗を流すのを厭わず、という日本人の武士道みたいな精神性が日本人を向上させた。そういう技術を磨いた。そのときに佐久間象山がこういうことを言っています。東洋的なもののあわれという考え方をもって西洋の技術革新をしたら、日本という国は小さい国であっても最高の国になれる。技術を持たないことには人間というのは生き残れない。技術があれば、寒さがあっても耐えられる。暑さがあっても耐えられる。そうでしょう。

私は毎日同じことをやるのが嫌いです。歴史家というのは、去年といまは時代が違う、ととらえます。常に違う視点でものごとをとらえないとだめなのです。龍馬は幕臣の勝海舟の家を訪れてアメリカの話に興味を持った。なぜか。アメリカでは、大統領という将軍は入れ札（選挙）によって選ばれる。選ばれたその人は、ホテルの給仕さんがいちばんサラリーが安いからそのいちばん底辺の人の生活をいかに守ろうかということで政治をする。ユートピア精神なのです。で、大統領をやめたら、またその人はお百姓さんになったり町工場の人になったりしている。大統領をやめた人がどうなっているのかよくわからない。だれも知らない。そういう社会は自由主義ということです。そのような話を聞いて、龍馬はアメリカの社会というものを知ると同時に、日本の海軍を強くすることによって日本を改革したいという意識を持ちました。

男性がいたら、女性は当然います。恋をします。龍馬も恋をしました。乙女姉さんは理想の女性です。郷土では同志の妹の平井加尾という人、江戸では千葉佐那という人、京都では町医の娘の榎崎龍という人と恋をしました。そして、ときたま浮気をしました。それで、お龍さんに嫉妬されました。

うちでは、夫婦で60歳になると会話がな。2人でいても、両方ともボーッとして孫の写真を見るとかしている（笑）。このあいだ、うちの家内と阪急ホテルの上から下を見ているとき、うちの家内はこういうことを言った。

「あの2人はうまくいく。こっちはうまくいかない」

「へえー、何でわかるの？」

「彼氏は交差点で別れる。彼女は彼にさようならと言って、すぐに次の男にメールをしている。これはうまくいかないよ」

ところが、もう1人はどうしたかという、ここに立って男性がじっとしている。男性というのは案外純粹なんです（笑）。ジッと女性の後ろ姿を見ているんです。で、その女性がチラッと思わず振り返る。その振り返りのチラッがあるかないかで人生が上手くいく。

何でそんなことがわかるのか？ うちの家内は幼稚園でゼロ歳児を預かっています。お母さんが携帯をしながら、ハイ、と子どもを預ける。また携帯をしながら帰っていくんですよ。で、お祖母さんがときたま来る。この前、運動会があった。そのお母さんも来て、カメラをもって撮り出した。お母さんは走ってくる自分の子どもの顔を見つけれない。お祖母さんはわかる。子どもの襟足を見てわかる。お母さんはいつも子どもの顔の正面しか見ていないから、横から見て自分の子どもの判断がつかないのです。

いま、女子大で新しい学科を作るときには人間なんとか学科というのを作ります。次に子ども学科というのを作るということです (笑)。子ども学科を作ると学生がたくさん集まるから。でも、それはあかん。お母さん学科を作らんとあかん (笑)。子どもの育て方とか子どもの見方を教える。80歳くらいの元名誉教授を連れてきて、戦中戦後を生きた人の体験をイヤというほど聞かさんとあかん。「篤姫」をやったというのはそういう意味なんです。日本の中でいちばん日本の女性の姿というものが薄れていくから、「篤姫」。女の道は一本道です、引き返すのは恥です、という気持ちがないとなんぼでも離婚するのやから。そのためにあれを作った。結婚して行ったところは最高の夢の世界で何があってもそこにしがみついて改革するような女性を作らないと、国というものも社会というものもみんな崩壊していきます。城が崩壊するのは攻められて崩壊するのと違います。内から崩壊します。家族から崩壊していくんです。そういうことを認識しないといけない。

お龍さんは自分の恋人が討たれそうになったとき裸でバーッと走っていった。暗殺されそうなときに自分の彼女が身を挺して知らせてくれたら、自分を助けてくれたと思ったら、一生別れられなくなるでしょう。そのときにできるだけのことをするというのは、その人に対する愛情の深さです。だから言うでしょう。国家のために心血を注ぐことを厭わず。同志のために涙を流すことを厭わず。誰々が卒業試験に落ちた。何やあいつはアホや、と言うたらいかん。私のノートをあげるから、来年はなんとかして卒業してよと (笑)。家族のためにだったら汗を流して一生懸命にする。襲撃されたあと、龍馬は霧島温泉で治療をします。湯湯治をします。当時としては珍しい新婚旅行に行きました。

最後に、死生観についてお話しします。きみたちに死生観と言ってもわからないと思いますが、生と死というものは、日本人のサムライの中では別の世界とは違うのです。これが日本人とヨーロッパ人のものの考え方の違いです。それはどういうことかということ、生の中に死あり、死の中に生あり。これは難しいですよ。私は、きのう神戸で講演をしました。神戸ホールは1,600人しか入れないから2回講演をしました。もう疲れてしまいました。前の3列くらいには100歳に近いくらいのおばあさんがいたから100歳に近いかなと思って、ここに100歳の人はいらっしゃいますかと聞いたら、だれも手を挙げませんでし

た(笑)。長生きして80歳まで生きて何もしない人は、亡くなっても人は何も思わない。ところが20歳で一生懸命やっている人が亡くなると、この人は惜しいなあと思った周りの人は、あの人のように生きてみたいと、その人の志をきちんと受け継いでくれるのです。ですから死んでもその志は二代三代と受け継がれます。

先ほど、私は言いました。天才というのはいない。父親が一生懸命家のために働いて、息子はそれで野球やゴルフをやった。親父はプロになれなかったけれど、なんとしても子どもはその志を継いで世界一のプロになる。オリンピック選手は二代三代がいます。その人の夢を追った人は必ず叶えられる。その中で生き残るのは、実力があるだけではあかん。生き残りたいという意識がそこでないと残れない。ですから龍馬の発想というのはいろいろな人たちに受け継がれました。岩崎弥太郎は龍馬の背中を追ったのではなくて、龍馬の夢を追ったんです。学ぶということは、真似ることがいちばんです。まず、いい人間を見せるのが学ぶということにいちばん効果があります。これで私の話を終わります。

5. 参加学生による感想

(1) 教育学研究科：趙明珠（中国）

坂本龍馬は弱虫だった子供から28歳で脱藩し、日本の龍馬になったということの後ろに、姉の乙女の影響は極めて大きかったと思う。

幼いころ、母を亡くした龍馬に3歳上の姉、乙女がいた。龍馬は幼いころは泣き虫で、小便たれ、気が弱かったが、姉の乙女は背が高く、剣術が上手で、全く逆の二人だった。母の代わりに乙女は剣術で龍馬を鍛えようと考えた。龍馬の生まれた時代は子供を大事に育てる時代だったらしい。子供が無事に育てばいいというような時代背景の中で、姉の乙女は龍馬に対してどれほどの愛情を持っていたのだろう。若しくは、器用な乙女は自分が女性だから出世できないという現実を知っているから、愛しい弟に自分の夢を叶えてもらいたかったのだろう。

また、姉の影響を受けた龍馬は大人になったころ、外国の文化や勝海舟との出会いは龍馬の人生を変えた。そして、龍馬は周りの人々にも影響を与えた。わずか33年の短かった生涯を終えたが、龍馬の人格的魅力は今でも高く評価され、今でも日本中の人々から愛され続けていることを知り感動した。

(2) 日本語・日本文化研修生：周静（中国）

「生きていても死んでいる者もいる」という言葉が中国にもある。それだけではなく、中国にはもう一つ言葉がある。それが「死んでいても生きている人もいる」である。三重大大学の寺子屋が企画してくれた「留学生と学ぶ坂本龍馬に関する研修旅行」を通じて、

坂本龍馬こそ「死んでいても生きている人」であるということが分かって来た。確かに、龍馬さんはもう亡くなったが、彼のスピリットは永遠に残っていけると思う。

龍馬さんは別に何かを残すために、戦ったわけではないと、よく分かっているが、龍馬さんが現代の若者たちにいろいろ残してくれたのは確かではないだろうか。私は、特に龍馬さんの「何を残すかが大切ではなく、どう生きたかが問題である」という考えが好きだ。

実を言うと、今回の旅行へ行く前に、私はそれほど龍馬さんへの興味を持ってなかった。ただ京都旅行が気になって、参加したのだった。しかし、そんな私でも、坂本龍馬に感動されて来た。今回寺子屋の皆さんのおかげで、素晴らしい京都研修旅行が出来て、本当にどうもありがとうございました。前は、あまり龍馬さんのことに興味を持っていなかったが、今回の研修旅行を通じて、これからもっと龍馬さんのことを知りたくなってきた。まずは、ドラマの「龍馬伝」から始めよう!!!

(3) 特別聴講学生：ヴィーダーケア アンドレアス (ドイツ)

The first time I heard about Sakamoto Ryoma was in my history class at university in Heidelberg in Germany. We didn't learn that much about him though. That is why I was surprised to see a big picture of him hanging in my home stay family's house. Before seeing it I didn't even know what he looked like and after I asked who the person was I was told that it was Sakamoto Ryoma and that he was a really important figure in Japanese history. After that, I discovered many Ryoma related things during my stay in Japan. Things like books, manga and even a new drama (Ryomaden) about him which I watched sometimes because it seemed to be interesting. I was really surprised how important he was for the Japanese at that time.

Seeing that Sakamoto Ryoma is really important in Japanese culture and history led me to the conclusion that it is better to know more about this man and his deeds so as to understand why he is so famous and maybe understand exactly what makes him more important than the other important men at the end of the Bakufu era like Itagaki Taisuke or Saigo Takamori who I learned a lot about during history classes in Germany.

The trip to Kyoto with the Japanese students from the Terakoya club was a good chance to learn more about Sakamoto Ryoma and I was able to connect some facts about him and the other Shishi during the visit to the museum and remembered a lot of what I thought I had long forgotten. The stay at the ryokan was also a nice experience because I was with Japanese students in a Japanese guesthouse and was able to see how everything is done in the Japanese way. The weather was not the best for those two days, but we were able to see some

places and it was fun.

All in all, the trip to Kyoto to learn more about one of Japan's most important historical persons, called Sakamoto Ryoma, was really interesting. As the only non-Asian foreigner, I had to speak only in Japanese which was a good experience because usually there is someone with whom I could have spoken in another language. All of the participants from Mie University were people I already knew before the trip so it wasn't a problem at all speaking with them. The visits to the different places that are connected to Sakamoto Ryoma in Kyoto were exiting and I was able to connect some facts I had learned before going on the trip.

I think that there should be more trips like this throughout the year. It is a good experience for both the Japanese as well as for the foreign students, and can lead to a better understanding of Japanese culture. Hearing or reading about something is often really different from seeing it with one's own eyes and to experience it in some way. That is why it is important to keep valuable culture as it is and to show it to the next generation so that it won't be forgotten.

Of course these trips cost a lot of money, but I think it is worth the cost. Especially for foreign students who don't know a lot about Japanese history or culture, it is really helpful to take part in trips like this and thus to be able to experience Japan in a way other than just visiting the usual tourist haunts!!

(4) 留学生と京都で学ぶ (てらこやサークル副部長: 医学部医学科4年 長江翔平)

8月の10日～11日まで留学生と京都に坂本龍馬のゆかりの地をめぐるしてきました。この京都研修旅行に行くにあたり自分たちで、どこに行くか、どこに泊まるかなどをみんな調べてきて話し合っただけで決めたのは、小学校の修学旅行の計画を立てているみたいで懐かしい感じがしました。直前にはみんな坂本龍馬について資料やまんがなどを讀んだりして、今回の京都研修旅行に行きました。

朝、三重大に集合して、京都に行くまでの間はバスだったので、先生が持ってきてくれた武田鉄也さん原作の坂本龍馬のマンガを讀みながら、坂本龍馬が昔京都で活躍した場所に行くと思うとわくわくしました。

京都についてまずは有名な寺田屋に行きました。寺田屋は坂本龍馬に興味がなくても見る価値ありと思いました。今ではめずらしい江戸時代の旅籠である。建物を見るだけでも当時の面影を感じさせてくれた。個人的に思ったことは、風呂場や中庭をみると田舎のお婆ちゃんの家に来たような懐かしさを感じた。

近くには船着場があった。かつての京都～大阪の船着場だった。寺田屋はその船宿の一つで人の往来も多く、忙しい宿ではあったものの、経済的に豊かだといわれていた。寺田屋は薩摩藩の定宿であり、そして坂本龍馬も寺田屋を京の定宿として利用していた。寺田屋事件や寺田屋騒動が起こったことでも有名である。また、坂本龍馬が愛用していた部屋「梅ノ間」があり龍馬の掛軸が掛けられている。寺田屋には当時を思わせる数々例えば、風呂やかまど、調理場所の様子はこじんまりしていながらも宿泊するために必要な品々がそろっていた。

建物そのものも特別大きいわけではないだろうが、部屋も多く迷路のようで、ふすまを外すことにより大部屋として使用できるともいう。歩きまわっても面白かった。また当時の刀の痕や龍馬が襲われた時に逃げた裏の階段などもあり、感動しました。またまわりの商店街もおもしろかった。寺田屋の近くに龍馬通り商店街がある。地元の商店街といった感じだ。茶屋や喫茶店もあったのでみんなで休憩をした。庶民的で京都の繁華街とはまた違った空気を感じた。

午後は映画村に行きみんなで昔の町並みなどを楽しみました。夜はみんなで集まり、明日の先生への質問を考えたりしました。次の日の朝は靈山護国神社に行きました。神社はひっそりとしていた。まばらではあるものの、坂本龍馬の墓は訪れる人が多い。しかし清水寺と比べると訪れる旅行者も少なくひっそりとしていた。維新の道や護国神社は人が少なく落ち着いて参拝できた。やはり人気は坂本龍馬の墓だ。神社の山間に同志中岡慎太郎の墓と並んで建っていた。1867年坂本龍馬は中岡慎太郎とともに京都近江屋で暗殺された。坂本龍馬の他にも多くのお墓、池田屋事件で失った志士たちや、桂小五郎など、維新に活躍した人たちの墓がある。維新に関心がある人なら、興味が注がれるだろう。墓地からの京都市街の景色はキレイでみんな写真を撮ったりしました。

その後はいよいよ今回のメインである靈山歴史館の館長である木村先生の講演を聞きました。木村先生は坂本龍馬の研究で有名な人なので、かなり難しい話をされるかと思ったが僕らにわかりやすく、坂本龍馬に関する全般的な話をしてくれた。話の後は昨日の夜みんなで話しあって決めた質問に全部親切に答えてくれて良かったです。話を聞いた後は館内に入ると、そこには幕末の資料が目白押しだった。貴重な資料の中から、常設展・特別展では約100点が展示されていました。志士達の肖像写真はもちろん、身に付けていた衣類や書簡、実際に使用した武器などの数々が、歴史のロマンを感じました。池田屋事件、龍馬暗殺など、幕末の数々の歴史舞台となった京都で、近代日本の礎となった先覚者たちの精神に触れることができました。

午後は京都市街にある近江屋跡、池田屋跡、桂小五郎像を見てまわって、長い長い京都

1泊2日の旅が終り、三重に帰りました。また日本に限られた期間しかいない留学生とともに旅行でいい思い出になりました。

(5) 京都研修を終えて（てらこやサークル部長：医学部医学科4年 塩地弘和）

そもそもの始まりは、顧問の先生の口から出た坂本龍馬という言葉であった。その時は、ただの歴史上の人物という以外、特に心が動くことはなかった。その後ふと立ち寄った書店の一角で、坂本龍馬を特集するコーナーが設けられているのが目に入った。普段なら素通りするところであるが、先生が言っていたことが思い出され、その中の一冊^{おもむろ}を徐に手に取った。パラパラとページをめくっているうちに、内容に引き込まれた。その日に数冊購入し、数日で読破した。ちょうどその頃、大学から国際交流事業の補助金申請の話があった為、これは坂本龍馬を留学生と共に学ぶ良い機会だと思いついた。日本人にとって自国の歴史について学ぶことは、他国の理解にとって必要不可欠であるし、留学生にとっても今の日本を知るためには昔の日本を知らねばならないと思います。効率的に坂本龍馬や日本文化を学べる場所はやはり京都がふさわしいと思い、京都研修を立案するに至った。

補助金申請の結果は補助可能とのことで、頭の中の出来事が一気に現実味を帯びた。申請の際に研修のアウトラインは出来上がっていたのだが、いざ細かいところを決めるとなるとこれがなかなか難しい。例えば、バスでの移動にかかる時間を調べたり、どこを訪れるのに相応しいのかを決めたりするのは、非常に骨が折れた。そうこうしているうちに、詳細な行程表ができたのは出発の直前であった。今回ほどインターネットの利便性を感じたことはなかった。なぜなら、バスでの移動時間は出発地と目的地を入れるだけで教えてくれ、しかも驚くべきことに実際に誤差はほとんどなかった。

京都研修前日、自分が考えたことがうまくいくだろうかという不安と、遠足の前日のような期待感であまりよく眠れなかった。

当日、混雑もなく京都に予定通りに到着し、まずは伏見龍馬街道に立ち寄った。寺田屋に到着し、鉄砲の弾のあとなどがあり生々しさを感じた。一日目はこの後伏見稲荷、太秦映画村を訪れた。その後民宿にて食事をしたのち、参加したメンバーで勉強会を行った。それぞれの意見は、やはり視点が違い聞いているだけで興味深かった。何より、留学生が坂本龍馬をかなり詳しく勉強していることに驚いた。

宿泊するのはやはり民宿がよい。ホテルでみんな分かれて宿泊では味気ない。畳に雑魚寝は何か懐かしさを感じ、童心を思い出す。そう言えば、修学旅行などは夜が一番おもしろかったし、今や夜の記憶しか残っていないぐらいである。昔からの例にもれず語り明かし、そしてぎりぎりまで寝た。

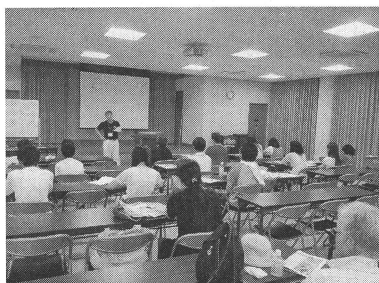
二日目のメインは、霊山歴史館の木村先生の講演である。木村先生は坂本龍馬研究の第

一人者で、著書も多数出版されていて、我々の為にわざわざ時間を割いて頂き、本当に恵まれていました。我々は事前に質問事項を準備していきましたが、立て板に水の如く淀みなくお答え頂き、理解が深まりました。

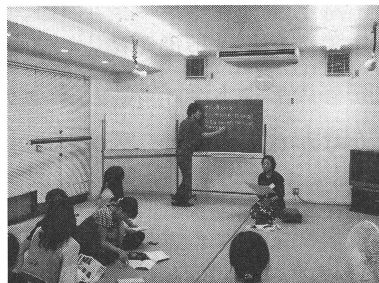
帰りのバスでは流石にみんな疲れた様子で、行きとは打って変わって静かで、研修も終わりの様相を呈していました。何事もなくうまくいってよかったという安堵感と、もう終わってしまうのかという寂しさが入り混じった気持ちに浸りました。

2日間の研修では京都の独特の雰囲気の中、五感をフルに使って学習することができ、心に残る印象的な2日間となりました。坂本龍馬について感じ取ったことはそれぞれ違うでしょうが、その根底にある一番大切なものは皆で共有できたのではないかと思います。それでよいのだと思います。そもそも history は his story なのですから。

最後になりましたが、寺子屋顧問の福岡先生にはお忙しい中企画の立案段階から相談に乗っていただき、研修後の面倒な後処理にもご助力頂きました。心より感謝申し上げます。



霊山歴史館 木村幸比古先生の講演



勉強会



寺田屋の庭にて



京都研修の仲間

6. 実施意義と考察

留学生支援サークル「てらこや」では、今回の国際交流基金事業は何か一つのテーマの下に、日本人学生と留学生が一緒に行動し共に考える研修旅行を実施したいということで、幕末～明治維新という時代において活躍した「坂本龍馬」を研修テーマとした。難しいテ

マだったが、勉強会や研修先で勉強し、幕末の混沌とした時期に龍馬をはじめ志士達がどのような思いで明日の日本を築こうとしたかを、日本人学生と留学生が共に学ぶよい機会となった。

研修を通して、留学生の中には坂本龍馬は「死んでいてもスピリットが日本人の心に永遠に生きている歴史上の人物であることがわかった」、「龍馬たち幕末の志士が切り開いてくれたからこそ今の日本があることがわかった」、「日本の歴史を専門に勉強してみたい」など、率直で感慨深い感想を得ることができた。一方、留学生にどのように関心をもってくれるか、理解してもらえるか心配だった日本人学生も、日本の歴史上の人物の一人にすぎない坂本龍馬のことを、留学生が一生懸命理解しようとしてくれた姿を見て、心から喜んでいった。

日本人学生もかなり本を読んで勉強し、留学生やご協力いただいた市民と心一つにして、研修の先々を回り、無事2日間の研修を実施することができた。この京都研修で、坂本龍馬の生き方に触れ、何らかの龍馬からのメッセージを個々に受け取ったかのような感覚があった。日本人が日本人学生にも留学生にも心に残る京都研修となったことは確かだったと思う。

このような交流活動は、留学生も日本人学生もお互いに成長できる点で毎回実施意義も大きい。留学生は短期滞在者が多く、成長過程を目では追えない。しかし、とりわけ留学生支援サークルに所属する日本人学生の成長はめざましいように思う。本学に入学しサークルに入ってきたばかりの学生は、内気で留学生とも話すことができない学生が多い。しかし、いつのまにか留学生への支援ばかりでなく、留学生会館のチューターに志願したり、地域の在日外国人への支援事業に進んで参加したり、本学の語学研修や国際事業にも積極的に参加したりするなど、自己変革しながら何かを掴んでいく。在学時代は、留学生にも日本人学生にも自分を見つめなおし、将来何をすればよいか、そのために何が必要か模索する、そんな自己変革が目覚しい時期でもある。そのような意味で、自己変革の上に自己変革をし、大業を成し遂げた坂本龍馬の生き方に触れることで、今回の「坂本龍馬の生き方から学ぶ現代の若者へのメッセージ」を探ろうとした研修は、大変意義あるものであったように思われる。

最後に、留学生と日本人学生が相互に学び合える生きた国際交流の場の提供こそ、国際交流センターの役割の一つでもあると考えているので、今後も「てらこや」サークルの顧問として、自己変革期における留学生や日本人学生の心の成長を楽しみながら、サークル活動支援をしていきたいと思う。

謝辞：京都市霊山歴史館の学芸課長の木村幸比古氏には、お忙しい中講演や講演資料の公開にご快諾いただきましたことを、心より感謝致します。また、研修先で留学生や日本人学生を温かく見守ってくださった市民の方々、部長・副部長はじめ研修全体を盛り上げてくれたサークルメンバーにも、心より感謝致します。

参考文献

- 木村武仁監修 (2009) 『龍馬と歩く京のまち』 京都新聞出版センター
- 木村幸比古他企画 (2010) 『2010年 NHK 大河ドラマ特別展龍馬伝』 NHK プロモーション
- 武田鉄矢・小山ゆう (2003) 『おーい!竜馬』 1～14、小学館
- 福岡昌子 (2004) 「全学部を対象とした「日本語学習サポート」の取り組み」(共著者：藤本久司、別府直苗) 『三重大学留学生センター紀要』 第6号、125～237.
- 福岡昌子 (2005) 「日本語学習サポートにおける活動意識に関する研究－日本人学生と留学生－」(共著者：藤本久司、別府直苗) 『三重大学留学生センター紀要』 第7号、49～67.